



重修真書太閤記

二編  
十

13  
459  
20



門外 5  
459  
20

消  
福  
永

重修真書太閤記二編卷之二十八

光秀朝倉家下仕官の事

并光秀公方家美濃御動座と勸事

同  
政  
會  
印

明智十兵衛光秀は六ヶ年の間諸國を經歷し日本  
凡六十餘州を周見廻りはるるに在付もた  
上方へ立歸り從弟を伴ひ越前ふ下向し三國乃東  
ある長崎のむらりふ仮住居しつとを幽暮けり  
弘治二年出立より同三年永祿元年二年三年四年  
と六年を過して越前ふ下著る光秀廿六歳あり  
永祿五年の秋加州一向宗の門徒等一揆を起し越前

大開記二編卷之二十八

領を犯し掠むるよりして朝倉左衛門督義景ナレを  
怒り一族ありける朝倉土佐守景行を大將として數千の  
兵士を差向らば此輩加州に發向し大聖寺月津御幸塚  
敷地乃邊に陣を取一揆等と合戦し及ぶ此時明智十兵衛  
軍見物のこ免彼處ありむき越前陣の邊に隠れ伺ひ  
見くありしにその夜此明くくは御幸塚乃東にありし  
一道の赤氣をちあがり南へあびさける故光秀の氣を  
望み見一揆の不意よ來る處を察し其處に越前方  
の陣く少くしをば知れものたのりしよや用心の躰も  
見つぎりしかバ弓を引かことこの諺のごとく越前勢ハ  
日が味方とおのへバ敗軍さをもんと氣の毒なりとて

生蓮華近江守陣にいりし由を語り御用心ある  
べし某の御本國坂北郡長崎邊に住居仕る浪人それ  
よていと少も川をば名のりけむ近江守不審く  
あつどもやづ大將土佐守の陣に参向して光秀に申  
せしことを有のまにぞ告ぐりある土佐守も如何も  
用心し若くはとあつとと總勢一同に用意をありし待  
かけはよそく一揆原數萬人をばびやうに押寄て  
くそ越前方よそか結くその手當して待まりけは  
あひごさうそ騒ぐりきもあくまの川にやうかこの  
切所小追川ありありひのすに防ぎ戦ひ光秀  
鎧甲をささりしがあやうに一揆の崩るりありさふ

我と已はれ越前勢不加より足輕の鐵炮をかりて  
馳廻り一揆の大將坪坂伯耆守といふものを但一發もち  
落しけむ一揆乍敗走して越前勢ありひのまゝに  
切勝しかそ勝鬨を作りかけ追討く十分に分捕し  
勇く悦び歸陣して彼明智光秀の智謀武勇のむとを  
義景よ申けるよいそぎ對面ある處して光秀茂  
呼出しその男振を見るに骨法かっこう進退たゞれ  
あゝ見見へけむバいうぢるめれ浪人せよと尋ぬる  
美濃浪人あゝ土岐の一族あやと申けるにや切  
素性もい厚かゝる當家ふ在る奉公そべり堪忍分  
五百貫とあゝあゝと何りけるにや光秀まづ

朝倉の家人とてありて

越前の五百貫を現米凡三百九十五石餘あり

今乃四斗苞九百八十七俵とあり

元より光秀諸國を遊歴して萬事小馴るるか

りれふとバ義景の心ふかあひ近習ふ伺候し軍法

兵談とありしをいひしりしり出頭して加増し終つ

五千貫の祿を受てより新公方家當國の御動座乃

ちて義景の名代とて金崎の御所へ参上せしに

新公方家御前へめし出され御懇乃上意を蒙り御夜譜

めされしことも度々なりしをいひしり御心安らむ

をいひしり然るより新公方家一乘谷へ渡御あり

安養寺よあそいゆかは光秀も毎日御機嫌伺として  
 参上せし新公方家もいよ親しくめさせむありあり  
 光秀心中よあまの様某今朝倉の家よありて五千貫の  
 祿を得るといへども新参のりのとて普代の老父は輕め  
 らねと近頃遺恨とありぬ今この君よ昵近し  
 他日御上洛の日御供とば將軍旗下乃士とあり先祖此  
 家名をも引起しりべきと眼前ふありなごの義景  
 性怯みしとて大事をあり得べらばあそぬ新公方家を  
 勧め奉りて美濃の織田信長をかこらんとてありひ  
 付けるありりひ我らも新公方家へ言上しける恐ある  
 申条よいへども當國より御座ゆへハ御本意を遂とせ

玉もんとかさるるいべー我らの故も主よこの朝倉の生質  
 優緩ありし物ごとさうゆくとおくいハ我一人先立ち  
 事とありべき心なりと見え然らばとて他の良將と  
 御擇ありし大義を起さ勢ありべきとて某當家の  
 新参よいハ君の御為よ先掛仕り御上洛の御供仕り  
 益くいと詞を工よして申上りて新公方家聞召と  
 汝も諸國を遍歴しければ風土のよあし武士の強弱  
 大形よ知らんその中よ美濃の國乃織田上總介  
 といふれハいう形るめれ我らと御尋ありけし光秀  
 手をもろと打く扱驚き入し君の御明察よてい  
 織田信長も當時の英雄よ無雙の良將と申べし

その故を以て知召し如く尾州二三郡の地頭より  
起る一國を平均し今川義元を破り齋藤龍興を滅し  
伊勢を切隨へ引箭のさるどくいとあつても烈風  
猛火ふたふべくはあつてこれ逆臣三好を討て君を京都  
に還し入奉らんりの信長より外はほあるへくは  
言上を以て新公方家を深く悦びを以て明智  
申出まるとも當家再興の神勅といふを依て我心を  
決しつりその故を先達く信長より密り使者を  
や越えや濃州へ移るべからしを勸むるといふ  
り信長の器量とらば持の上義景の所存を以て  
かひりも今ふ延引せし如何して信長を語らひ如何

して義景も辭さるる光秀がありし処を計らひ申せ  
仰られかば光秀答奉りけるハ今一應義景へ御催促  
ありて事埒明申さば信長を頼せしめて御旗を  
擧らるべしその時義景も力成合を以て御意に  
申上るも新公方家を尤と思召然らばいと  
義景乃りて催促の使者を遣はさんと御用意  
ありける処り不慮のことし我れ出來りしれその故を義景  
最愛の男子あり名を阿君九とよ三十を半過ての獨子  
なるが寵愛限りあり今年六月廿五日急病發して  
阿君九早世あり

北國七國志よ永祿十一年六月廿五日義景の息阿君九

卒去母を小宰相局と云鞍谷刑部大輔嗣知の女

義景大ふ力を落し晝夜歎さかあしける餘り政事  
をも顧見はすとは正体あり有様を我の見る目を  
いぢらり老臣等さへはくは終を諫めあはれむるとい  
ども更り聞入は明智光秀此体を見く大ま何きと  
こそ扱わかくる愚癡の大將と今まで知ざりけるとの  
く身しさま長く此人は許し居らる我身の爲もの  
よ後しからばそや新公方家を我々のうしこれ  
國を出し奉り我身もその跡は付く立退るやとおひ  
急ぎ新公方家の御前へ参上し義景愛子の悲歎ふ

國政を忘れし事兒女乃上りて未練の振舞と申べし  
所詮御大事を補佐し奉るる器量よといはるは  
よきやうに義景へ御斷りなす濃州へ御動座然る  
るくはそん光秀もやうに義景をよりに持いて御跡あり  
濃州へ参上し信長へ某が申勸奉りし由を御沙汰  
あり被下しそ難有奉存しを申けし新公方家  
よく心得させし仰出され扱のち上野中勢大輔  
清信長岡兵部大輔藤孝兩人と美濃國岐阜へ遣はれ  
偏り頼まをよ由を仰られしかば信長義も及らば  
畏り奉るしを御答申て抑新公方家の濃州へ  
御動座し由を事のしを尋ぬるよはれり

木下藤吉郎うげ勸すすめ所ところありとぞそとへは今年ことしの春  
織田殿おだのどの伊勢國いせのくによ發向はつこうありと北伊勢きたいせ八郡やっしちほ大形おほがた織田家おだのけよ  
從したがひ武威ぶいありやや南勢なんせいあり振ふるひかば今いまも北島きたしまも恐おそ  
るるなりなりならならば然しからば隣國りんこくよ於おいて誰たれうハ美濃尾張みのおち張はりを  
窺うかがひのあらんやや此こゝ時とき大事だいじを舉あげむあべきおぼしむ  
私わがの軍いさまよいその名な正ただしかば衆人しゆじんありひ付つけららぬ  
如何いかもも肺肝はいかんを碎くだく処ところへか移うつる物聞ものきの爲ためよ  
出いし置まけり忍しのびの者もの立歸たちかへて注進ちゆうしんしけるる南都なんと  
一乘院いっしやういんの覺慶得業かくけいとくごうをを江州かうしゆへ御動座ごどうざのち  
聽きく還俗えんぞくすは義兵ぎへいを舉あげさせせしんを免めん  
若州わかしゆよ移うつらるむひやら今いまも越前えちぜんよすはりそ

朝倉あさくらを頼たのむををもも義景ぎけい大義だいきありとと御本意ごほんい乃な  
遂すなに勢せいられれから御歎ごたんさはるるよう迄いた委碎いさいふ  
申出まをしかばは究く竟けいの事ことなりらしや新公方家しんこうかたけを  
當國とうこくへへ奉ほうり此君このきみを守立まもりたてをを以もつ軍いの名なとと  
洛陽らくやうよ責せ上の上り三好さんこう松永まつながを追討おひし名譽なごほを京都きやうとより  
舉あげるんんと多年たねん乃な本懐ほんくわいありるべしし御手初ごてそとめ  
あるるべしと勸すすめめかば織田殿おだのどのげめのと歡よろこびむし木下きのしたよ  
よよ計はらひひと仰おほられれよよ秀吉ひでよし淺野あさの峰須賀みねすか  
兩人ふたりを忍しのびむるる越前えちぜんより遣つかへる容子ようこを伺うかがひけるよ  
新公方家しんこうかたけハ一乘谷いっしやうやよよはは眠近みよぢの諸士しよし大方おほ  
金かね崎さきよ住居ぢゆうきよさるよよ聞出ききだしけるありらからいと

大隆記二編卷之二十一



兩人を使とらうし信長より書翰とらむ長岡兵部大輔の許へ遣とらむ持参りて往復三四度り及びく始申長岡よりたう返答ありてそのうち新公方家より御使とらし越るるりいりあれをなすく木下の方寸ふ出と終に將軍家再興の大功を立らんとりいれ不思議なりける智畧といふべし

新公方家濃州へ御動座の事

并信長とめて新公方家よ御目見の事

長岡兵部大輔藤孝上野中務大輔清信兩人新公方家の御使として濃州ふ來りかバ織田殿より不破河内守と途中より出迎を岐阜本丸よ請とら

ゆづ長途旅行の勞とるをゆめくのち信長威儀と繕ひ對面ありある時ふ兩使新公方家の上意とめ御上洛ゆきて御敵と亡ぼし御本意を遂られんと偏し信長の武畧と多れおぼしめし由仰出さるけるより信長畏く言上ありけるを仰出されし趣御大事ありし信長なごの弓箭にて成就仕りいんと覺束ねく存し共をかく御使残下され頼思召し此上意を蒙りし事まづ以弓馬の家ふ生まし甲斐あり幾そむくの面目と申へ抑信長前將軍家ふ參勤仕り御懇乃上意を蒙り尾州の守護職を賜りし御恩片時も忘却仕らばいり

しとく四海静謐の計畧り心と碎さしへども時猶至  
らにけり本意を遂申さばけりちよ前將軍家不慮  
の御事おなうせられしと傳承せり何れども残念  
ふ存し奉り即時小京都へ切上り三好松永と  
誅戮仕りいそふやと存しへ共自國乃取合ひあ  
平均仕らば路次も頗る難義しとけいひ川を以て  
一日くと延引よ及びい処今年ハ辱領國も平和小  
隣國此かろきも大方切鎮めい処へ義兵の思召立  
あそしはまを承せりあそれ當國へ御動座もい  
信長一身の力を盡し公方家の御旗も從ひ切上り  
いそふ誰れハ支え申さすと存付くいより密ふ

言上に及びい形り何と扱一日もそく當國へ御動座  
なり下されいそく神速り發向仕へそまろいころの肯  
を以てよ後しと御披露給そりいしとそ兩使を丁寧  
よ饗應の上かきされしとよ長岡上野も信長乃  
心休むれりしと勇氣言葉りあそれしと悦ひ  
朝倉の心中と黒白の相違ありと立歸り言上を  
かば新公方家も飛立るとよあそしとめあうら義景の  
止め奉らん時何と仰らおるそよと案ト煩とせむ  
しとくも御大事の前乃小事と思召切をむひ即使節  
を義景の許へ遣とそよ此年比御馳走の条莫大の  
忠義祝著あそしとめされい然るよ今度阿君丸早世乃



奮き苦にゆへども所勞中歩行騎馬とも難海仕間  
御免を蒙り申度ゆへ一族なりける中務丞景恒  
家臣前波藤右衛門兩人ふ二千餘人とさう添  
御發足の時六路次を警固一奉るべしと定免  
たり新公方家あまき義景得心を後とらふ  
逗留その詮あるべし片時もゆるく濃州へ御移り  
何るべしと七月十六日新公方家越前一乗谷を御立  
あり御供の面々日比旺近の衆中あり路次の警衛  
まなふ兼日沙汰一置まつれば首尾整ひてさげ  
眼をゆへその夜ハ今庄に御止宿あり  
一乗谷より福井へ三里福井より府中鯖波を経て

越前南條郡今庄より十里  
翌十七日ふも江州へ入るまひ木下の地藏堂より  
御参詣あまき御休息の所當國小谷の浅井  
備前守長政参上御目見のち餐應奉ること尤嚴重  
なり  
今庄より板鳥まが二里板鳥より江州伊香郡中河内へ  
三里中河内より椿市柳瀬を經る木の本まで八里  
十二町あり  
越前より御送り此のゆへ此處より御暇をとりて  
歸國せりそのち長政御先に立こ小谷の休懐寺へ  
入御なり奉る木の本より二里半あり御旅の設け

殊勝ありて長政の父下野守久政も参上して御目見  
たり奉り種々の珍物あびりて獻上ありかひて  
濃州より御迎ふ不破河内守菅谷九右衛門内藤勝介  
三人三千餘騎りて路次を警固し見渡さかきり  
織田家乃勢ありぬ処をわたり小谷より三日御逗留  
し扱休懐寺を御出立ありけし長政も御供ふ  
はるふつりやや

小谷より春照野へ四里それより藤川へ一里半  
より美濃不破郡關原へ一里半此間江濃の國界  
あり關原より垂井へ一里半垂井より赤坂へ一里  
十二町赤坂より美江寺へ二里八町美江寺より河渡へ

一里六町河渡より岐阜ふりて此行程十五里餘り  
あまふ二日路あり

長政も藤川より御暇賜り小谷へ歸るも岐阜より  
村井長門守島田所之助参上し萬事を取行ひ西庄  
立正寺を以て御旅館と定めり同月廿五日著御  
まゝゆき御饗應の役人多勢伺ひて善と盡し美と  
はくせし御旅館に四面をば隔るも勇士一萬餘人  
夜をよむに篝をこき拆を打ち嚴重に守護奉る  
休朝倉家とは雲泥の相違ありとて昵近衆をよめ  
下くまで悦びのさしありて一日御休息ありて  
同廿七日よ織田上總介直垂尋常ふ取締ひ立正寺へ

参上まゐりしめめく御目見ごめみの式しきを行なれ國綱くにつな乃御太刀ごたて  
 一腰ひとこしあ毛けの馬うま一匹御鎧ごよろい二領沈香しんかう百斤縮絹ちぢみ百端鳥目ひゃくたん  
 千貫せんくわんを献上けんじやうあり又供奉おんがらの面おもてへもそりて送り物送りものあり  
 けりあがりつづれも信長のぶなが乃大器おほきを感賞かんじやうありそのうち  
 新公方しんこうほう義昭よしまさ君長岡上野ながのうえの兩人を以もつて信長のぶながの芳志かうし  
 近比ちかぢ満足まんじつありあはれめさるる旨あやを仰おほらせ猶なほこの上うへ  
 神速しんそくふ御上洛ごじやうらくの御本意ごほんいを遂とぎさ勢せうら勢せう様御馳走ごちそう  
 たのぞ思召おもひめさるる由上意よじやういありしる信長のぶなが敬たがひて御請ごうけい  
 申上まをさるるあかひも言上ごんじやう仕つかる信長のぶなが前將軍ぜんじやう軍の御恩ごおんを  
 蒙かかりし事海うみよりも深ふかく山やまよりも高たかくされバ御仇ごあひ伐き  
 二ふたり泉下いづみの御怨ごうらを晴はら度存ぞくぞんしなうら既まふ年月としづきを

經へい處しころ御動座ごどうざよりし事信長のぶながが本意ほんいは叶かなひ難有あづかる  
 奉存ほうぞん夜の御所經營ごしよけいぎやう仕つかるべくいども不日ふじつり供奉くわんぱん仕つかり  
 江州邊かうしゅうまで打出直うちだすちきふ京都きやうとへ還御かへりあり奉ほうるべくいども  
 十餘日じゆじゆじつがわら思召おもひめ當寺たうじり御座ござあるべくいどもとり上うへ  
 かバ新公方しんこうほう家けよにも嬉うれしくあがり也上洛じやうらくの事ことさわらふ  
 埒明らちあむしとくかひもあはれもはたふさふさゆりと信長のぶながと  
 ふりく頼たのむる由御直ごちきふ上意じやういあり大館おほたて仁木にぎ一色いしき三淵みやう  
 和田沼田わだぬま曾我飯河そがいひが二階堂にかいだうの人ひとよまで故郷こきやうりかへる  
 よろこび今更夢いまさらゆめありあがりひあやし中なかつるもあはれ理ことわりあれ  
 信長のぶながより不破河内守ふわがわのり村井長門守むらゐのちやうもんしを使つかして小谷こたにへ  
 さ遣つかし今度いまど小谷こたにあての御りてあり下寧したなわのり

大隅言二編卷之二十九  
喜びをのめり近日常公方家の御供として江州へ進發の  
由を告ぐひしめ浅井方あとも御使の旨をよみしひ  
から御上洛の御案内かゝり奉る由をやりしり  
使者をへ返されしり

重修真書太閤記二編卷之二十八終

重修真書太閤記二編卷之二十九

江州浅井家由來の事

并安養寺三郎左衛門異見乃事

江州北方五郡の守護坂田郡小谷の城主浅井備前守  
長政とのつとめ大織冠鎌足公の後胤閑院の左大臣冬嗣公の  
苗裔三条大納言公綱卿六代乃孫あり  
藤原系圖を考ゆるふ閑院左大臣六代の孫閑院太政大臣  
公季公より九代權大納言公氏卿より正親町三条家  
祖あり公氏卿より十代内大臣實雅公の嫡子權大納言  
公治卿二男權大納言太宰帥從一位公綱卿あり公綱卿

太閤記二編卷之二十九





藤原重政と名乗りけるがのちあまき新右衛門尉とやけり  
 才智發明あまのなるべ武邊よ功者なるまし海島ふ  
 京極家よもも重くりて那しひたり永正の比より  
 重政乃孫ふ新三郎亮政無雙の剛將よももつり  
 下野村一處の地頭より討て出江北五郡を切從(小谷山  
 )新城と築き浅井備前守とて江南の六角より掠  
 取一郡を取かへ美濃の齋藤道三と垂井赤坂り  
 戦ふく不破安八の郡を切取越前乃朝倉と八入魂あり  
 浅井の旗色日くふ繁昌一その嫡子下野守久政その  
 嫡子今の備前守長政あま長政累代乃弓箭を請繼  
 く武威るとんと近國よ振ひける上その侍も多きは

亮政の代よ相傳をりれよもつづれも又當承乃  
 ののなるを以て信長都へ打とのほる小この浅井を手ふ  
 不入してま叶あはれとありそれれれ去永祿八年  
 諸士を集め評定ありけるふ木下藤吉郎中様何様  
 長政を江北の英雄よも六角承禎など一列のりれり  
 此節長政いほむ無妻のよ承りひ御妹君のふ市乃  
 御味方ふ参るま是を御縁者ふなされて然るべ  
 御方御年のあども似合ふまはむべりま後より  
 御入興のよを仰込と然るべり上か信長聞食  
 此義たつとふ然るる魚りされ共のよも浅井や音信

をいとはし誰を以て入るべきやと宣ひきふ藤吉郎  
承り今時我君の御威名を知ざるればなれば  
推して使を遣はさるれば誰を否やべきされども  
多し侍衆の中も浅井の侍と因縁なきものある  
は誰ありともや出まづべしとあるまじし時不破  
河内守進出某子細く浅井の侍安養寺三郎左衛門  
と好のゆへ彼も便り入り入ればと望むけるあり  
信長悦ぶを知られ夫もそ究竟のことなればやく罷越  
中入るべしと仰らるるに安養寺の宿所小案内に  
江州ありて安養寺の宿所小案内に  
永禄八年浅井下野守久政五十四歳備前守長政

廿一歳ありて安養寺三郎左衛門不破河内守を呼迎へ只今何事乃  
はてそむくの來臨心元あくいと尋ねけり河内守  
されハハ信長一人の娘ありさうぬべき壻かひを  
尋ねしが近國乃大名衆の中より此浅井殿を置て  
あつとやへき方ありとの事の媒を頼やさんかたあ  
態と参向仕りゆあるれやく此を御披露して首尾  
整へまづと申けり三郎左衛門熟とあれを聞何さる  
これ然るべきことありひたるふより小谷へ出仕して  
あ此事を披露なけり下野守久政諸侍を集めて  
評定ありけるよ遠藤喜右衛門進出と申す様より

本朝記二編卷之二十一

婚禮を貴賤とも輕く定めたる大禮なるは一度の  
使者を請直し御返答近頃疎忽と申すべし  
つづ此度を懇し御饗應のち是より御答申す  
旨より使者を返されし事通途のとうと勸めたる  
よりつづもこの義ふ一同しその趣を以て安養寺に  
申含められしは安養寺より河内守へそれ由を  
答申するあり河内守も岐阜へ歸りこの趣を言上  
としかば信長さめあるべしこの上を安養寺に  
表向より申すべし今度と不破河内守内藤勝助二人を  
遣へし江州へ遣へし一向取持の様と申す  
兩使もかきぬて江州へ進發し安養寺が許へ

行向ひ今度の縁邊信長懇望とありしを呉安養寺を  
頼入由を述べし三郎左衛門も余儀なくす小谷へ  
出仕し下野守并備前守へあつて濃州より使者  
到着の由を申し抑信長も當時名譽の勇將より  
武威近國小肩を並ぶるめれなり然るも當屋形を  
懇望し縁者をなくんと望まると別義とありし由を  
程なく都へ切すのぼり三好松永の惡逆をいふ  
謀るものありし時當國を心安く通行せんが  
為とら何様終ふ天下の亂を鎮め太平を致さん  
その信長より外ありしは然英雄と親しくなれし  
らぬんと當家の大幸と申す

此方を賞美しその娘を以て此方へ送らんとす越るるを  
そが當家の面目なれば御承知ありし然るべしと申す  
下野守久政實りとありし成程汝り申す信長此節  
武畧さうんありて追付天下ふ旗を揚四海一統の功を  
立盡き大將と申べし然れども越前の朝倉と信長と  
代々の不快あり信長天下一統の功を立すのちかある  
朝倉を亡びさんとせらるるなれば我が家も故備前守  
殿より朝倉と盟約し子孫別心を存すは尚いと  
誓ひし事あれば朝倉と信長と弓箭ふ及むんとて  
朝倉を見放んも故備前守殿の尊靈一對し不孝と  
いひしべし荷し後榮とせらるる先祖ふそむこと

人の道と言がごとし此事をば安養寺何とありの我々と  
問きし時遠藤喜右衛門やけるは仰まるとは御尤も存は  
信長かあり所望をらるることなれば上洛の道筋を心安  
あさむやの了見しむひとよその身の勝手をありの  
なれば本意乃如く都ふ旗を揚られば當家を  
自旗下とせし何事も彼家の指揮ふ背ととなるは  
その時朝倉を毛手ふ付んと爲らるること必だ  
朝倉元來織田と累代の敵國あれば決して信長の下知  
り従ふありしその時信長越前軍を向らるべし  
當方よりこれと諫むるとも信長聞入るべし然る  
朝倉と一川となり信長を敵とて軍をくれんは千ふ

大問言一終末之二十一

下

一川の勝とあるべし。彼その時ハ兩家一時滅亡。及べし  
 さりとて信長と佐けく朝倉を亡びしむ。えんこと六ゆめ  
 かあふまど左あふ。只今より後日とそらう。御返答  
 阿る。あふさう。や。諫めける。安養寺三郎左衛門黙然とて  
 聞居。うり。が久政の側へ進。詞を和げ。中様遠藤  
 が遠慮。乃ほ。至極の理。いへ。どを退。愚案を  
 廻ら。い。ゆ。な。今朝倉の盟をたの。信長と中違。は  
 む。當方直。信長乃。讎とあり。中。朝倉。か  
 り。余所。よ。見。あ。あ。その時朝倉急度。當家を  
 見。繼。ぐ。存。亡。を。同。く。せ。ら。る。べ。し。や。人の心の底ハ  
 とう。ま。か。ら。今。の。信長。が。中。旨。ふ。從。を。これ

縁者ふなり。あ。も。信長。と。て。旗。を。立。られ。い。えん。う  
 それ。よ。こ。只。今。さ。當。り。く。定。め。ご。一。天下。は。旗。を。立  
 ら。ま。は。朝倉。と。を。弓。箭。よ。及。あ。あ。の。見。え。る。前。の  
 こと。案。ト。て。眼前。の。仇。を。り。と。免。あ。ふ。と。は。あ。ら。う。計。と。も  
 存。ぞ。ら。ま。は。い。え。れ。上。に。今。ぞ。あ。そ。信長。も。當。家。も。朝倉。も  
 一。列。乃。大名。な。れ。い。づ。も。そ。を。や。く。天子。の。御。為。は。四海。の  
 亂。と。ぐ。め。や。あ。を。守。護。し。たら。ん。ハ。あ。れ。武將。と。い。ふ。下  
 大名。の。列。は。何。れ。その。時。ハ。い。づ。も。武將。の。下。知。ふ  
 從。ふ。ま。と。これ。上。と。重。ん。ト。朝。憲。よ。從。あ。と。の。下。然。る。に  
 持。れ。を。背。き。く。私。を。立。られ。あ。朝。威。と。か。ら。ん。ト。法。度。よ  
 違。ふ。罪。を。犯。ま。と。云。ふ。ま。ら。り。武將。と。て。王。命。あ。や。ぐ。ふ

めれを誅罰せると元來その職といふ處一朝倉の  
朝敵となりたるらんをいつふ先祖の誓約何事不として  
當方ゆりの朝敵とせらるるに及ぶべらんや某が存ざる所ハ  
いふと見へざる後日の体を棄させられ目の前乃安危  
を御ちりひひちんと却て弓箭の御本意くと存し  
角りせば信長の武畧を畏る様り聞えし共軍の  
道を直きとせりつゝ勝とて當方の弓箭を慕ひ娘戎  
嫁しめんと云ハ父母の心貴もいやしたも同じとてあそ  
直ある道とせりべし其れをいふと萌もせざるよしと  
思ひて無下し斷仰せしれんを邪もく人の心を破ると  
りべし此義とて何とぞ思召あやとりけるを聞て中島

日向守礒野丹波守などのつづも此義穩やふ聞えしと  
りけるあそり久政も何様尤ありと同心ありて然ハ不破  
内藤と對面ある處一とて兩使を小谷へ招請し種々餐應  
ありとそめち此方も專使を以てりべしとて則安養寺  
三郎左衛門小委細をり含め下野守の使とあし不破  
内藤と打ちとて濃州へあそ出立けれ

織田淺井縁者とあする事  
并信長佐和山へ趣く事

不破河内守内藤勝介兩人を淺井家の使者安養寺  
三郎左衛門を伴ひ岐阜よあそり斯と言上をせしり信長  
喜で安養寺と口出され對面ありけるふ安養寺謹く

中けるハ兩度まで御懇の御使と立られ仰ぐごはる趣  
 おとふ久政長政の身あとり面目のいさり如何なる悦び  
 入るいさる速り御請中へさ処あるは長政が心頭聊  
 難澁仕る一義のいさり猶豫仕りて併りその故を  
 試べー長政が祖父亮政越前の朝倉と入魂の義いて  
 永く子孫くまて互に助け合へるとの誓約を仕りて  
 然るは長政を御縁者とたり親しく御旗の蔭に立あび  
 いそん事大慶至極い共朝倉ハ累代御家と不快に  
 様り承り及びてハ朝倉が家を滅びされん時淺井  
 か進退窮乏していそんを存種くと勘弁仕りゆへども  
 らの趣を言上しそちともかくも仰より事とせらる

いそんと申し出さゆと申し信長聞食備州の心底まことに  
 信義を守り申さるる条近比以て甘心を我が朝倉と不快  
 あれども今こそ我越前へ仇をとりて越前より我國  
 へ軍と出さしとせば先祖の不快をその分なれども  
 今こそ當り何の遺恨もなけり朝倉を滅びて  
 その地を貪る心あり信長不肖なれども天下蒼生に  
 争乱よめるを救はんため兵をあげて四方の  
 朝憲を輕し我意を張るよふはるのれを平けんといふ  
 の怨とあつち私のとちありいさる遺恨の人たりとも  
 扱ひ人朝廷のちめは忠を盡さぬんは某些少もこれ  
 疎むべしあんやこの旨を以て長政も安堵しとせらる

大目言二編卷之三十九  
朝倉家と對し私の怨とぞもつて如き信長もあつたに  
宣ひつれば三郎左衛門承り御尤の仰よりひき有るに  
とハ存ひひのひも久政老兵も何事も念入申し間  
箇様のことも伺ひに彌御定相違なく君天下ふ  
御旗を上さるるふと朝倉を御しつゝあき首何卒  
御印代賜り久政と見せり度と申けり信長呵と  
打笑ひつゝ大丈夫の一言金鐵より堅く何ぞ誓書ふ  
及ぶらんやされども其方を使かりさるるべしとて  
即時は自筆の證文と安養寺に渡されこの上違心  
なつて不日ふ入興を急ぐべし萬事その方と打つるを  
も教あひつゝよろしく計らひしと宣ひければ三郎左衛門

大に悦びあつたの證書を賜る上は久政安堵仕るべし長政を  
元より違心ひそげ然る姫君御入興の事其涯分るるを  
廻り申すにゆとかの誓書を押しつゝ岐阜を  
出立し小谷へ引返し信長口狀の趣を申し件の誓書成  
出し見勢けり久政長政此上を縁者りたるも苦  
かゝると有る既りその用意よ取らんとせし処へ  
遠藤喜右衛門進出さるは信長誓書とつて  
朝倉と宿意ありと申さるれども遠く後日を考ふれば  
その誓書及古しそひべし信長をいさむれば遺恨あるを  
ありし大將も何れも朝倉殿少量ありて大事ありと  
おろしつゝ終つて信長の機をなつかふと出来るべし



その時を信長よそ何とも思ひなすまじけきとも天下乃  
法として朝倉と誅せむる有べし今誓書も朝家へ  
對して罪あるも私の宿意をそとに信長あはれとあるも  
聞えつると然ら當方朝倉と存亡を一川よなるまべしと  
あがめさば織田と親しくたりむるはるる然るも  
織田と親しくたりむるは朝倉とば棄るべしと諫め  
かども一座の評定織田と親しくするは尤可然や  
勧めにより久政よも心を決して縁組のとも定まり  
けしむる喜右衛門も再び諫むるも及ぶは是も同  
ちも然しそのち浅井家より結納の使者を以て厚板  
薄板綿錦善美を盡して岐阜へ送り遣すしけれは

信長も殊の外悦びをむひ使者をさうくりて申あり  
かつはまその年乃四月吉日良辰と撰り信長の養女  
お市の方今年廿二歳近國無雙の美人と聞え高く  
日比織田大隅守信廣主のりとも住居ゆか今度  
江州小谷の城へ入興ありけしむる小谷の御方と美濃  
よてあやけり  
お市の方天文十三年甲辰の生れ燈火の火性長政ら  
十四年乙巳の生れ同じ姓あり相姓するは  
方書よ見つたり果して然り  
小谷よてる織田の姫君乃麗とて貴やうみ見へ  
るふのあはれ調度の結構善を盡し美と盡し婚姻

の禮レまレ古實ヲを正シ作法嚴重ナリりレれば淺井の家中同  
よレあレを悦ビ長政ハ市ノ方乃聞レたマる容色を愛テ  
最愛セられレるバ兩家水魚ノありレひレをナりテもリりク  
あレける中らハいハれバ新公方家濃州御動座ノ時も長政  
木本モで出張シ御饗應以下丁寧ハ沙汰セ上藤川モて  
御モりレにも参上セてレはレ信長ノも淺井ヲ踈略  
あく會釋アリけレハ淺井方ノも等閑ナらズおシひ  
長政ノ婿入の為岐阜ノ参向あるべき旨度ノもレも  
信長ノれヲ辭退あり尤近日上洛の次ハ此方より参ル  
る間此方へ御出し及ハびレとキりレる内新公方家  
御動座ありりハ不日ハ上洛の催ありりハ江州の

地利を見分ルからレ長政ハ對面シその外路次ノことも合シ  
をん為永祿十年八月信長勢揃ありりハ切淺井家へ使者  
をリつキ送られけるハ近日新公方家御上洛ハはレも  
べレ切の御道開らるハめ信長來七日佐和山モて参向  
せレ長政ハ彼處ニ御越あるべシとの事なり  
けるハより長政ノもかレとキりレるハ御出せ  
待中魚ノ返答ありしハ信長直ハ江州へ出立あるべシと  
用意はまシけるハ家老ノ面ニ諫めける様淺井ハ御縁者  
なガらハいハるハ心底をりガに隨分御用心ありて大勢御也  
連然るべシとキけレ木下藤吉郎ノさキ大勢を率して御参向  
はレんハ君ノ武威をさシに似たりるハびの御出ハ御初對面の

式と御路筋の御相談の事なり甲冑兵器を平常此  
山狩川狩に準じらるべし御供も平服なるべし  
大丈夫の御威光といひ畏れ歸伏仕るべし何れぞ  
御用心乃ち大勢召し出さるも御身の守護ありや  
備へ某御供仕り御傍に候し守護仕るべし各々御安心あり  
べしと言上り信長さまにめし左に我あり何の用心  
よ及ぶもんやとて上下百五十人を召具し江州も  
平服めく近習めく木下藤吉郎只壹人隨ひあり江州侍を  
ててやと人といふと這虫ともありぬ大勇不敵の大將と  
舌を振ひ膽を寒しるも理か  
重修真書太閤記二編卷之二十九終

重修真書太閤記二編卷之三十一

信長長政對面の事

并遠藤喜右衛門信長を撃んと謀事

新公方家越前より濃州へ御動座あり織田家と  
頼もるも信長義兵を發し京都へ攻上らんと  
支度取らるる江州へ立越浅井備前守に對面  
あるべしとてその旨をかめり遣し永祿十二年八月  
七日信長木下藤吉郎以下百五十餘人を召具し  
江州佐和山へ趣き但藤吉郎も用心ありし事  
以て蜂須賀稲田堀尾梶田日比野とめし事

馴らした士ども千餘人を忍びくよ出立を栢原醒井番場  
 摺り峠の峯々谷々相圖を定め何時までも不意ふ  
 らせ集るる處とてり合て伏置ける思慮のほどよそ  
 かにたのらぬ信長とてふ摺針峠に至らざるは浅井  
 かめくよそ愛ふ休息所を志川らひ置長政も出張  
 なく初く對面あり信長よ長政のこれまで出迎へ  
 まふとを悦ぶれ長政の家人ハ信長乃他國(出する  
 へ)用心の体もなしく打らぬろき平服よて供とせり  
 り此百四五十人よ過びこに名ふ聞えりめれとてハ  
 一人も召具しよぬ心の底をさうまかきけりよ世の  
 常ありぬ大器沈勇の良將とハこの人あるべしと

いささ恐怖の心と起し案ふ違ふてぞ見へりり  
 互の會釋と終りてのち信長やはさるるへ備州よハ  
 まづ佐和山へ御越あるべし某を跡よりゆるく参るべし  
 有けるありり長政よハまづ佐和山へ歸り城の主磯野  
 丹波守よ馳走のこととてさうりり付置ぬり信長の  
 くの体と見くつりり嚴重あぞり沙汰せられり  
 良時うつり信長峠をさるる薄暮に及る佐和山へ  
 著るハ長政城門よて出迎ひ案内して奥よ入る峠の  
 こゝろよ江州の地下人とも芝生よ群居し音ふ  
 聞えり大將あまふその行列さぞけりからんおひ  
 けふよ何の晴かまきさるるもなれば見物のを共

信長酒宴の席に臨み直に公方家御上洛の大小  
事相談り及び江南の承禎入道の心底おぼめし彌  
御味方ふ参るや否や切へしと使者を遣てしられ返答を  
あつよきまつべしその左右次第ふより評定あるべし  
いそるれば長政尤の由埃拶なり其後種々饗應山と海と  
ほまより求めかざり深き意厚き志のちとをあらはさ  
く此間浅井の長臣とくめし出され信長をぬくり  
言葉をかけれられ盃を賜りける次遠藤喜右衛門及び  
けと喜右衛門とく出く膝行し信長の相形骨法と  
くくひ詞のそりぐと考へ何さぬ名譽乃良將と此入

わつるべしされどもその言語ふいさく不審あきまは  
當家との縁組まことに謀の種と思はれり長く當方と  
好と結ぶる志ありは斯輕の体こそ来ぬるはそ  
幸なれ神速く信長を撃殺し新公方家を當國に迎へ  
此方の力を以て三好と打落し京都の還御を取持て  
ふと末代の名譽當時の規摹たるべしと暴謀を謀  
出し燬毒を用ひんとあひ付し共長政ふ知をばあ  
かるべしとおひ長政が座を立を待し長政更ふ座を立と  
わつけば喜右衛門ひさく小谷へ馳歸り久政より其  
謀を示し合はる久政これと承引を信長平服まで  
いさく用心の体あくる來臨ありし兄弟婚姻の好を

あつてはつりおれを情なく毒殺せんといふ道の  
よや殺し得たりと信長の勇猛ふねを欺く毒を  
飼つといふれんハ浅井弓箭乃耻辱なりゆめこの事  
ありひ止るべしと厳しく制しければ喜右衛門も力や  
佐和山へ歸り孰ありつり此度信長を殺さば後日小  
かあつて悔あるべし主人ハ免れなく共これ撃めは浅井  
の家此為あらんと一圖ありひ定めこの上は信長より  
かたり刺殺さるやと了簡一短刀を懐くかつりつりや  
近寄人と透を見合けども故なく推参さる様  
あつて心を痛けるうち酌立立る小性が長柄を見  
是究竟と小性代り御酌仕らんと座席は進み居

あそあやうけれ

佐和山より米原箕浦あつて菅江石田上坂を経て小谷  
なり此間今道四里なりをある處この往復三時  
あつて知づ

木下藤吉郎もあつて遠藤り顔色は殺氣あつてそれ  
を怪し酒をものほむ万事は眼を配り心を付て居り  
しか只今遠藤り長柄を以て酌立立る体いりつて常  
なり福を藤吉郎これといつて座を立て喜右衛門  
の向廻り御邊ハ老体と申身柄といひ小性代り酌を  
いせめられんとおとなげあつて銚子をあつて賜りゆ  
某あそ年若くそ相應の役ふいづれといひあつて遠藤り

持くる長柄と請取んとかりけるを遠藤答へてそれ久政の  
 使として御座席へあつて出さへいへどもさるる御りてあ  
 義りなうせむく御酌仕りて一獻を進め奉らんと存ド  
 態と罷立こは勿く御斟酌ふ及ト御邊ハ殿の御近習も  
 御客人なりたむ掛れがふ任をさへといふ藤吉郎ち笑ひ  
 御酌よなつて美女う小年う麗そさ人の役なるべ御邊ハ  
 大男あそく荒くれらるる却く酒宴の興も醒以べ小男は  
 猿面冠者乃猿が酌あそ似合しけと争ふを見て長政  
 遠藤は向ひ御客ふ逆あそ無禮こそや木下よゆゆ  
 ぶとありけるふより十ふ九川仕課なりしはと  
 心中ふ怒りを起しなむ苦笑して元の座りかへ

木下居るく長柄とり今日御丁寧ある御りてか  
 信長あそく大悦仕る無骨の至りなる猿の猿舞し  
 御肴とさめんと戯さながら長政一獻とさめんと  
 信長しつ終を見らひいさむ藤吉郎酌して御亭主も  
 御盃取上るべしとありけしハ長政も辭退りも却る隔心  
 なるふ似たりとく掛のりつ引請快よく吞乾れける死  
 藤吉郎扇をとり立上り兵の交頼も何る中ハ酒りやと  
 聲打あげくうひりれハ長政一入笑壺り入るひるる  
 信長うちとひいさむ藤吉郎骨あ今日我娘と備州へ  
 送りさめての對面ハ猿舞を忌むるれとさむれ  
 長政も座中の興しそ真猿あれとあはるもさむひる

睦まけけよ見へる處へ六角承禎のりと行向ひ一和田  
伊賀守立わたりしとあん内しちあはより藤吉郎心中大よ  
よろこひ鉤子と取て小性まゆづり元の座席り立歸る  
實も藤吉郎わらうまをば遠藤う爲ふ不思議の災い  
座敷の体ゆを後ま沙汰しけりける扱も留伊賀守  
も新公方家の御使とて箕作り行向ひ一所承禎よにも  
不興氣うそその敷御返事もあく御使を御使や  
なるも無禮至極のりてちり故そのは罷歸りしとや  
けるにまの信長されちる我をめより承禎ハ三好と  
同心して新公方家の御敵あるづれといひつるは  
義なるハまづ當國へ切く入六角を追討し上洛の道と

開くべきなり長政も此節あれば随分忠功を立ぬと  
約定ありまの濃州へ立歸りその用意をたす  
ふして長政も暇を佐和山を立るる長政も御送り  
とて打立路次中の警固もなす如く尤嚴重に  
守護をせめ摺針より長政を引返し信長も栢原  
の成菩提院をりつゝ旅館となす長政よりの御馳走  
みハ浅井縫殿助中島九郎次郎遠藤喜右衛門三人を付置  
をこり然るも信長ハいづも快くころるを我堀の  
領地なれば我國も同じとていさう用心の体なく酒宴  
ありしち熟醉すはまを見く遠藤喜右衛門佐和山  
よそハ本望とてげさりが爰處に我々天のあつる

大開言二編六三三

ト



時と云べしこれ今夜中是非なく打取んり此とありひ定め  
 只一人駿馬ふ鞭を何げ小谷へもりてかたり久政長政ふ  
 ちけるる免角信長を表裏反覆の大將なり當家と長く  
 好を結ぶれんと覺束なり且信長の心より始終違えぬ  
 様ふ何とてなせむるべき末も遂ぬ事よ暇かき勝  
 るるんと謀なきに似たり又對し乃軍しるいよる信長ふ  
 勝とてかき今夜栢原より意をゆるし打とけし熟醉  
 せらるる処へ侍六七十人斗り喜右衛門次第と仰付らる  
 屋へ首尾よく信長を討取もべし供の者ハ町家より  
 止宿させしむハバあれを討し最安かきその勢を  
 拔さば濃州へ亂入し岐阜を追落し新公方家を此方

一迎奉り高島郡を都へ切上り三好一家を攻破り天下の  
 旗色をあびるをいへこれ天の與ある幸なりとや  
 御同心ありと然るべしと申けし共久政長政父子更ふ  
 得心を後信長のかちと懇切よいし何よ情なく  
 義を失ひ飼鳥を殺す如く熟醉の人を討べきさる振舞  
 をなすたらん人ふ誰かハ從ひ靡くべしんや新公方家は  
 たるるも思ひ奉らるれそむるは從ふ長岡大館以下此  
 歴く多しやと當方不義の弓箭をたれしを給ふべき  
 人望ふ背き武門の眞加り盡んと疑ひなり努力さ様  
 の事をおりなすべしといふ免られし喜右衛門も  
 詮方あくはげやと出行けし

栢原成菩提院天台宗今猶京極家の香火地あり

秀言智謀危ふきを防ぐ事

并明智光秀信長ふ仕官の事

遠藤喜右衛門後の患を謀る信長を撃んとし主人父子を勸めしうも久政長政これを用ひぞ却る様々教訓を加えられしより是非あく小谷成出く栢原ふ立歸り何氣な死体あて馳走の役を取扱ひらがるあつてあつてび得難き時節あま主人もよくなき義理ごとく同心なれども終るハ主家の為なり争てらあひひ込る一大事この儘よく空しく止んハ何もうふ本意あつて浅井掃部をかこらひ密にこの事をかまひけるよ

掃部尤と同心し時刻移りてあかるべし早打立んとひめく程ふ掃部が郎等五百餘人手毎に得物を提ぐるを集る喜右衛門大ふよろこび此勢よく何事も成就せむとて弓鐵炮と引りけ備をかめて成菩提院へお寄鬼神も怖る信長と今宵を討滅がり濃州を切取べしさう共斥候と遣しそ容子を見よやとて士卒二三人と遣しけるふその者どもあえなく馳歸り何の勢か存ぞぬども數千の兵士成菩提院の表門裏門小門ハ云ふ及ぶ寺の四方ふ充滿し篝火を焼く守護する体いと嚴重に見つはバ勿く此勢をうりよそ押寄るも更ふおの詮なうるふと注進以遠藤うち笑ひ何条さとの

あるへきそれと味方の兵士の馳走振う焚篝かうや  
奮し我く寄るなふ妨げあはざるをいそれあしや  
押寄よやと操出まを掃部あし止めめくくはるは進  
行んと危あし信長はよとふ猿猴の梢を傳ふと  
そやと大將なるは用心をとなしといふべうは御邊  
ひとりかこふ趣き實否を見ゆゆく進むとも退く共  
早く案内しつべし我等ハ人数を押えく注進をゆい  
べしといふ喜右衛門實をとありひ鎧ぬぎ捨平服より  
成菩提院へせ行くあれを伺はばあそいふ彼士卒が  
告しにちゆも違ふ織田家の兵士四方をかめく夥し  
遠藤案より相違し内の容体いふやとありは寺中ふ

入んとする処を警固の兵士是をとがめ夜は深く深し  
何りのなるは案内もなく押し通らるるやとふ遠藤  
いそぐ其ハ遠藤喜右衛門とて御馳走の役人わろが  
御饗應の事ふ付く主ふたづぬる子細ありく小谷  
宵のちと罷越只今歸りていかりと答ふれはさふ通  
参らせん見知の人やあるといふ聲乃下よりいかりを  
遠藤殿ふ相違ありといふを聞きはる疑ありやと  
通しけり喜右衛門あまりのあしきとふとあくハ何れ  
手比侍衆よやと問その時兵士等一同いふれハ洲の股乃  
木下の組比りのよと蜂須賀某之かぬく主人の制令を  
あめり余所目に守護せしが今夜をいさくろあめり子細

ありと組頭のつらよりかゝハ警衛仕るまといとの  
是も木下遠藤う振舞よ目と付居りしは宵のほど  
より喜右衛門のつら行しうかいられ見づればかごと  
なるべとやと尋ぬるまといと知る人なく能く  
さぐりさけハ遠藤只一人馬に打のりつづと走り去ると  
告るのれありあるにより扱を彼う肝を取りひきて  
呉んぞりれまとかの蜂須賀黨を呼起しかゝ計らひと  
遠藤寺中ふ入るつらあひひくるハ大將熟酔しと  
打とけしと見ぬば扱の侍ふかぞり志をいしと  
守護するのれありかゝ天授の良將を我等うふと

しと謀まけることのそつらと驚き感ト士卒をそら  
かゝ浅井掃部ふ早く人数を纏り引廻さるべし隙とり  
てハ何やほちあるべしと告りつら掃部もはまそ  
あるべしと弓鐵炮の備をそち心ありせよ在所へ  
かゝり免角するうちよ夜をそわのと曙はるころ  
信長成菩提院と御立ありけまはつとより馳集り  
々ん二千餘りの兵士前後に列を立て守護し信長  
御覽どろの者共も何の程よりかこの處まで赤着  
きしぞ誰う差圖しと斯乃如く路次の警固し仕よ  
まつる扱と不審ありとハこれ木下藤吉郎がひて  
中付し所しとそらと答る道とそやめ事故たうく

六月廿二日編入之三

岐阜ふ歸城ゆはは切後藤吉郎とめし出立江州の  
 始末を御尋ありけるよ佐和山にて遠藤の御酌立  
 時のありさる害心を挿むのものと見請ひし御覽の如く  
 計らひ又栢原よりくも何やしきことゆ故組の者を呼  
 寄御旅館と守護仕らせしと上りかバ今ふはじめぬ  
 こと形が藤吉郎が遠慮の程は頼母をれその方人  
 隨身さればいり形る處よ赴くとも氣遣ひありとぞ  
 悦びまふ斯く信長あは佐木承禎入道の心底を惡  
 むひまづ是を打滅し御上洛の道を開きしやふとぞ  
 出陣の用意あきりなる時新公方家信長とめされ  
 明智光秀がことと仰出さし抑あめ者事ハ越前より

ありはまをすいり時く伺度しりゆの形り上洛の節ハ先手ふ  
 加そり働さしべしと約束あしたりしがそぞふその期も  
 近川をぬ苦からげハ何の手へなりとを組入て給ひと  
 仰出されしより信長謹く君のるもえし忠を盡さんと  
 申し士を早賤凡下をいそげ招き集むる時節はゆら  
 りハ上意なり何とぞ否やしきやなりなから其者ハ只今  
 何処よいやらんと申けし新公方家を仰らむと  
 元來當國累代の士とて明智十兵衛光秀と申者なり定めて  
 出陣の沙汰を聞バ訴へ出るとあると宣ひけるり  
 一兩日過く木下藤吉郎より明智光秀と申りし奉公望  
 あり参上のより代執りけし終り光秀朝倉の家乃



忠志を盡し一に尤以神妙ありらるる御上洛に付御先手  
参り忠戦をいひし一廉の恩賞を行ふ一さてその  
累代祖先の面を起し末代乃後榮を開くべきこと此度の  
忠に依処ありと申渡されれば光秀平伏し身不肖ふ  
ひども天下の御大事にこそ加はり涯分の忠を盡し  
せんこと元よりの本意にては某當國を流浪仕り諸國を  
遍歴しひども去ぬべき仕合もたなくむふしく年月茂  
過しゆうち不圖越前より住居仕りまゝに此心を以て  
莫大の恩を受くはいつも彼國風にて大將も諸將も我國  
廣くとありあはく古参新参を隔て忠功を立てる涯を  
存じばその上新公方家の御頼を黙止し事深く恐入ては

より早く御跡を慕ひ出國仕りてはと言上りかば信長  
元より快くぬ越前の浪人と聞て義景が充行し知行ふ  
まゝにあらぬ今ハ出陣の日もあはれりややく  
先手よ着く江州へ打入働さしはたがへ他國の軍に幾度  
出合し我々とたづみあはし光秀今まで得る風雲天氣の  
術を申し出けるはより信長も耳新らしく聞きひかハ  
善軍師を得たりと悦びまふ御前伺公の面もあはれ  
光秀り辨舌ふ欺られこそを難ぶべき道をも知ぬハ  
希代の名士を得るあはれと甘心あるものゝあるにあり木下  
り意中乃機密をのふる暇なく信長の心よまうせてこれを  
用ひられあはれつゝ先陣の下知をゆるさずしこと願は

かゝるあめとも為るべき道もなげきばあをらく忍び居りけり  
 木下を孫子の間と呉子の應變とを能知ておれご用ひ  
 然して今川を破り北畠を威し洲股り築く美濃を  
 取ると囊中のめれを探るふ等しそれちまて皆間と  
 變とふよりて進退せり今又明智を風雲天氣を以て  
 信長を干次この術四國の白井淨三入道より傳授せりと  
 聞えられども持方根本ハ孫子始計の天時地利呉子の  
 料敵ふられるのこ

重修真書太閤記二編卷之三十終

三 都 書 林

|             |         |
|-------------|---------|
| 三條通升屋町      | 出雲寺文次郎  |
| 心齋橋通北久太郎町   | 河内屋喜兵衛  |
| 同 博勞町       | 河内屋茂兵衛  |
| 同 筋本町角      | 河内屋藤兵衛  |
| 日本橋通二丁目     | 須原屋茂兵衛  |
| 同 二丁目       | 山城屋佐兵衛  |
| 同           | 小林新兵衛   |
| 芝神明前        | 岡田屋嘉七   |
| 本石町十軒店      | 英子屋大助   |
| 大傳馬町二丁目     | 下子屋平兵衛  |
| 横山町三丁目      | 和泉屋金右衛門 |
| 浅草茅町二丁目     | 須原屋伊八   |
| 筋違御門外旋籠町二丁目 | 紙原屋徳八   |



